

## 学生の英語ライティングに見る不定世界の描写

江口, 巧  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786413>

---

出版情報：英語英文学論叢. 66, pp.15-34, 2016-03-25. 九州大学英語英文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 学生の英語ライティングに見る不定世界の描写

江 口 巧

## 1. 序

日本人学生の英語ライティングの特徴を述べた拙論（2015）において、学生は事態の描写において命題内容そのものに注意を向け、事態の時に関する内的側面、すなわち進行相や完了相などアスペクトに対する配慮が行き届かなくなる傾向にあることを論じた。ライティングの授業で提出される学生の文章を点検する際、適切な文脈で適切なアスペクト表現を用いた英文に触れると、英語的発想を備えたその英文の“センス”を感じることがある。しかしながら、実際にはまだ多くの文章において、アスペクト以外の領域でも日本人的な発想を抜け切れていないと感じることが多い。このように、英語ライティングにおいて、そこに配慮が行き届けばセンスの感じられる英文になるが、実際にはそれがかなわず、典型的に日本人的な発想に陥りがちなもうひとつの領域として、今回は不定世界の描写を取り上げてみたい。これは、既に過去に生じた事態、あるいは現時点で生じている確定した事態と異なり、現実には生じていない事態や、仮想された世界を描く描写の仕方である。ここでは、前者の世界を「定 (definite)」の世界とよび、一方後者を「不定 (non-definite)」の世界と呼ぶことにする。日本人の英語において、不定世界の描写への配慮がおろそかになる要因のひとつとして日本語からの干渉もありうると思われるが、本稿では、日本人学生に与えた設問の回答、および自由な発想で書かせたエッセイライティングの中から、不定世界の描写に成功していない例を、時にその数値を挙げながら示し、この領域の描写に日本人学生の注意が十分に向けられていない事実を明らかにするとともに、その考えられうる要因をも探っていきたい。

## 2. 不定世界－定義

具体的に議論を進める前に、本節で「不定世界」の定義を試み、それを表す命題を四つに下位分類する。

「不定世界」は、先に述べたように、「定世界」と対立する概念である。「定世界」は、既に起こった、あるいは現在生じている事態を表すため、原則として、話し手はその事態の真実性を保証することになる。一方、「不定世界」は、それ以外の確定していない世界を表すため、話し手はその命題の真実性に言質を与えていない。この確定していない事態を表す命題として、次のような四つの命題が考えられる。その具体例とともに示す。

- (1) I. 疑問命題 ex.) Does she live in Fukuoka?
- II. 否定命題 ex.) He did not succeed in the project.
- III. 仮想命題 ex.) If it is fine tomorrow, we'll go on a picnic.
- IV. 陳述緩和命題 ex.) He might be on a business trip now.

I. の疑問命題に関して、話し手は命題の真偽には言及せず、それを聞き手に問うている。II. の否定命題は対応する肯定命題 “He succeeded in the project” の真実性を否定している。III. の仮想命題は、話し手が想定した世界を描写しており、主節の命題 “we'll go on a picnic” は確実に成立する見込みのある事態ではなく、if 節で仮想された事態が実現した場合に成立する事態を述べている。なお、この III. の仮想命題には、“If we had caught the bus, we would be at the destination now” のような、学校文法でいう「仮定法」で表される命題も含まれる。最後に IV. の陳述緩和命題において、話し手は “He is on a business trip now” という命題の信憑性に100%の確信がもてず、断定の度合いを抑えた言い方を選択している。この命題は話し手の推測に依存するものであるため、推測命題と呼ぶこともできるであろう。

以上のように、上に挙げた四つの命題はいずれも確定した命題ということではできず、ここでは「不定命題」として分類される。

### 3. 議論

#### 3.1. 疑問命題、否定命題、仮想命題

今後、不定世界の描写において、日本人学生の意識がおろそかになっていると思われる側面をそれぞれの不定命題ごとに論じていく。ただし、前節で不定命題として四つの命題に下位区分したが、これは四つの命題がすべての点において相互に異質のものであるというわけではない。この中でも疑問命題、否定命題、仮想命題はいくらか似た性質を有

し、統語的にも共通した特徴がある。詳細の議論は以下に譲るが、この理由のため、同じ不定命題の中でも、疑問命題、否定命題、仮想命題をひと括りにしておく方が今後の議論の上でも有益となってくる。

さて、日本人学生は、上の (1) I, II に示すように、命題がそれぞれ疑問命題と否定命題であることを明示する主語と助動詞の語順倒置、not や never など否定辞の使用については何の問題も生じない。しかし英語では、これら明示的な手段に加え、これらが確定していない命題であることを示唆する、いわゆる否定対極表現なるものが存在する。以下の例のイタリックの表現がそうである。

- (2) Are there *any* tables in the room?
- (3) Have you *ever* been to the United States?
- (4) I don't see *any* problems with the proposal.

これら any および ever などの否定対極表現は、明示的な否定辞の使用に比べると、適切に使用されていないケースが目立つ。まず、否定対極表現は、比較級や最上級、before 節などの例外を除き、原則として疑問文と否定文にしか現れることができないが、<sup>1</sup> このことを十分に認識していない日本人学生は、時に以下のように誤って肯定文に ever を用いることがある。

- (5) \*I have *ever* been to the United States.

もちろん多くの学生は、否定対極表現として最も出現頻度の高い any とそれに対応する some の使用の区別は、上に挙げた (2)、(4) やその肯定形 (例 (6), (7)) など比較的容易な構文では対応できている。

- (6) There are *some* tables in the room.
- (7) There are *some* problems with the proposal.

---

1 以下にそれぞれ、比較級、最上級、before 節で否定対極表現が用いられた例を挙げる。

- i) The car was far more expensive than I could *possibly* afford.
- ii) This is the most interesting film that I have *ever* seen.
- iii) The interviewer ended the interview before I could say *anything*.

これらの“比較的容易な構文”に特徴的な要素のひとつは、描写される名詞が可算名詞で具象的な事物を表していることである。学生にとっては、ある個体が複数存在するという定的な概念と、ひとつも存在しないという不定的な概念がそれぞれ *some* と (not) *any* で表されるということは、有形で具象的な個体については把握しやすいものと思われる。一方で、不可算名詞であったり (例 (8))、あるいは可算名詞であっても抽象的な概念を表すようなケース (例 (9)) になると、*any* を使用する割合が少なくなり、不適切に *any* を省いた形が生じたり (例 (8)b)、場合によっては *any* を含む句自体をそもそも用いないということも出てくる (例 (9)b)。

- (8) a. I did not have *any* difficulty finding your place.  
 b. ?I did not have difficulty finding your place.  
 (9) a. Are those two ideas different in *any* way?  
 b. Are those two ideas different?

さらに、*any* が副詞として用いられた場合には、*any* を用いない傾向がさらに強まる。<sup>2</sup>

- (10) a. Is that *any* different from my idea?  
 b. Is that different from my idea?  
 (11) a. Do you feel *any* better today?  
 b. Do you feel better today?  
 (12) a. He did not go *any* further.  
 b. ?He did not go further.

*any* は形容詞の用法であれ副詞の用法であれ、数量的な修飾語であるが、

---

2 ここでの議論は、*any* を用いない形が不適切ということでは必ずしもない。*any* を用いない本文 (10)b, (11)b の例も適格であるし、同様に以下の例も一般的に使用される。特に疑問文では *any* のない形式も容認されるようである。

i) Did you have difficulty finding my place?

筆者がここで主張したいのは、*any* の使用が義務的であるにせよ、そうでないにせよ、日本人学生は *any* が修飾する概念が抽象的であればあるほど、*any* を使用しなくなる傾向があるということである。

日本人学生にとっては、any が修飾する概念が、典型的には可算名詞で物理的に掌握可能な概念 (table, problem など) であると理解が容易であるが、一方、修飾する語が形容詞 (better, different など) や副詞 (further など) のように抽象的で物理的に触知しにくいものになると、any の表す概念が把握しにくくなるのだと推測される。

また、意味的な観点から考えると、any などの否定対極表現は、命題内容の真理値を根本的に変えるものではなく、命題内容に“色を添える”働きをしてみると言うてよい。例えば、(10) は「それは私のアイデアといくらか違ったところがありますか」、(11) は「今日はいくらか気分はいいですか」のように「いくらか」を含む訳語が可能であるが、このことからわかる通り、any の有無は命題内容の真理値に実質的な影響を及ぼすのではなく、数量的に微妙な色合いを醸し出すものである。江口 (2015) でも述べたように、命題内容に実質的に関わる部分に関心を向けがちな日本人にとっては、このような微妙なニュアンスを請け負う表現は苦手な領域に入ると言うてよい。<sup>3</sup>

さて、これまで述べてきた否定対極表現は、疑問命題、否定命題に限らず、仮想命題においても現れる。以下に示す通りである。

(13) Please don't hesitate to contact me if you have *any* questions about this matter.

(14) If you know of *any* individual who could possibly teach on Tuesday, please let me know.

上述した通り、仮想命題はある事態の生起を想定したものであるため、現実にかかることが保証されたものではない。従って確定した命題とは言えない。このように、疑問命題や否定命題と同じ不定命題であるため、否定対極表現が現れるのは自然なことである。上で、三つの命題が統語的に似た特徴をもつと述べた所以である。なお、上記 (13) の例文につ

3 以下の否定文に現れた single も同様の領域に入る表現と思われる。

i) There was not a *single* sign of life in the snow-covered mountains.

ここで single は否定の意味を強める働きがあり、日本人学生の書いた英文で目にすることは少ない。

いて、筆者が担当するライティングクラスの学生39名に if 以下を当該の文脈を日本語で与えて英語を書かせたところ、any を使用していた学生は20名であり、全学生の50%を上回っていた。このことは、仮定命題においても否定対極表現が用いられることを日本人学生はある程度理解していることを示す。

しかしながら、学生たちにとって煩わしい用法は、以下のように肯定文に現れた any の用法である。

(15) You can choose *any* book you like.

(16) *Anyone* can apply for membership.

仮に、否定対極表現の any が不定の文脈で現れることを知っているとしても、このような学生にとって、肯定文は不定の文脈ではないため、結果的に、(15)、(16) に現れた any とこれまで見てきた any を全く別の用法ととり、場合によっては、この種の any を定命題を表すものとしてしまうことがある。しかし、これらの any は、見方によってはいずれも同種のものであり、統一した説明が可能である。(15) では、例えば、聞き手は自分の目の前に置かれた複数の本 ( $B_1, B_2, B_3, \dots B_x$ ) のうち、どれでも好きな本を選んでよい、つまり、 $B_1$  を選んだとしても、 $B_2$  を選んだとしても、 $B_3$  を選んだとしても、あるいは他のどれを選んだとしても容認されるのである。すなわち、この any book には、表面上の形式には現れていない It would be acceptable whether you choose  $B_1, B_2, B_3, \dots$  or  $B_x$  という、いわば if 節 (に相当する whether 節) が含意されていると考えられるのである。同様に、(16) についても、すべての人物 ( $P_1, P_2, P_3, \dots P_x$ ) について、それが  $P_1$  であっても、 $P_2$  であっても、 $P_3$  であっても、誰でも会員になれるということであり、やはり if 節が想定されている。つまり、肯定文に現れている any の使用には、仮定命題が想定されていると言える。このように考えると、これまで見てきた any は、(15)、(16) の例を含めてすべて、確定した定命題ではなく、何らかの意味で不定命題を表していると考えられるのである。日本人学生にはこの点を誤解している学生が多く、極端な場合、(15)、(16) に現れた any を、それと意味の類似した every と同じ用法であると理解してしまいがちである。every は、any と異なり、確定した命題を表す文脈で現れる。

この二つの形式の用法は根本的なところで峻別されるという点が十分に理解されていないようである。

これまで、日本人学生の間で、不定命題における否定対極表現 *any* の使用が適切になされていないケース、あるいは誤解されているケースを見てきたが、不定命題が明示的にそれとわかる形式を伴わずに現れると、さらに否定対極表現は適切に使用されにくくなるケースを見ておこう。

- (17) We were too tired to go *any* further, so we stopped and set up camp for the night. (榎田ほか, p. 34)
- (18) Please don't hesitate to contact me with *any* questions you might have.

(17) は、明示的な否定辞を伴っていないが、前半部分の *too tired* に先行された *to go any further* の部分に否定の含意がある。従って、ここに否定対極表現 *any* が現れている。(18) では、*you might have* を含めた文の表す内容から判断すると、「もし何かご質問があれば…」という意味が暗示されている。<sup>4</sup> つまり、この文は先に (13) に挙げた *if* 節を含む文とほぼ等価であり、ここでもやはり否定対極表現 *any* が現れている。

- (13) Please don't hesitate to contact me if you have *any* questions about this matter.

このような文脈で、学生が適切に *any* を用いることができるかを見るため、本年度の検定試験対策の「テストテイキング」の授業の期末試験において、上の二つの文 (17)、(18) の *any* の部分を空欄にして、二つの空欄に共通する単語を入れるよう指示する設問を与えた。この二つの例文はいずれも授業中にこの形式のままで取り上げ、*any* に関する説明を施していたにもかかわらず、*any* と回答した学生は61名中35名 (57.4%) であった。

さらに、この傾向は次の数字を挙げることで明らかとなろう。否定対極表現の使用に関する同様の調査を行う目的で、今度はライティングク

4 (18) の名詞句 *any questions* の後に現れた *you might have* については、後の議論で取り上げられる。

ラスの学生39名に以下の例文を挙げ、二つの文の空所に共通して入る語を書かせた。

(19) We were too tired to go ( ) further, so we stopped and set up camp for the night.

(20) The firefighters are well trained to deal with ( ) emergency.  
(榎田ほか, p. 51)

例文(19)は(17)と同じである。(20)の空欄にはやはり any が入るが、この any の用法は興味深く、上に見た「どんな緊急事態にも対処できるよ」という意味で、肯定文に現れる any の用法であるのと同時に、「もし何か緊急事態が生じたとしても…」というニュアンスも感じられ、その意味では、if 節が暗示されていると解釈することも可能である。この設問を課したライティングクラスでは、上のケースと異なり、事前に授業で any を取り上げたことは一度もなかったのであるが、正しく any と回答した学生は、39名中わずか8名で、20.5%の数値であった。この数値は、否定対極表現に対して日本人学生の意識がいかに薄いかを示すと同時に、if 節を明示的に伴った(13)では50%余りの学生が any を用いていたことからすると、不定命題を表す形式が明示的に現れていない場合には否定対極表現に対する認識がさらに薄くなることを示している。<sup>5</sup>

以上、本節では、英語ライティングにおいて、日本人学生の不定世界

---

5 このことは次の調査結果からもうかがえる。本文で述べたように、ライティングクラスの学生39名を対象に例文(13)(=i))に関して行った調査では、if 節で any を用いた学生は51.3%であった。

i) Please don't hesitate to contact me if you have *any* questions about this matter.

同じ学生たちに、同様の文脈で以下のような英文の後に続けて文を書かせてみた。期待する回答は本文例(18)のようなものであるが、この文では if 節は明示的に現れていない。すると、ここで any を用いていた学生の割合は33.3%に減少した。

ii) Please don't hesitate to contact me with

さらに興味深いことに、i) で any を用いた20名の学生のうち、ii) で any を用いていない学生が9名にも上った。このことは、if 節が明示されないことが、不定命題であるという認識を妨げる要因となりうることを示している。

の描写に対する意識がおろそかになりがちなケースとして疑問命題、否定命題、仮想命題を取り上げ、そこに共通して現れる資格のある否定対極表現が適切に使用されない傾向にあることを論じた。<sup>6</sup>

### 3.2. 陳述緩和命題

不定命題は、既に述べたように、前節で取り上げた疑問命題、否定命題、仮想命題に加え、陳述緩和命題を含む。この陳述緩和命題が表す命題内容は、話し手がその信憑性について100%の確信をもって述べているのではなく、話し手の推測に委ねられる部分が多い。典型的には、まだ起こっていない未来の事態を予測する場合（例（21））や、現時点での事態の生起を推測して述べる場合（例（22））である。

(21) We *might* have a heavy rain tomorrow.

(22) He *might* be having trouble driving in this bad weather.

このような場合、上の例に現れた助動詞 *might* のほか、*may* などが現れやすい。日本人学生は、上の例文のように、文の骨格をなす叙述部分に助動詞を用いることは容易にできる。彼らがフリーライティングで、この

---

6 筆者が担当する英語ライティングクラスで、学生の提出した英語エッセイに筆者が *any* を用いて添削を施した例を三例挙げておく。a. が学生のもとの英文、b. が添削後の英文である。もともと学生が書いた英語も誤りではないが、*any* を用いて表現することも可能であるという意味で学生には提示したつもりである。なお、本稿で学生が実際に書いた英文として提示する例では、議論に関わる部分以外の箇所は、筆者の方で正しく書き変えているものもある。

- i) a. Is Earth the only planet where life forms live?  
b. Is Earth the only planet where *any* form of life can exist?
- ii) a. If you begin to be interested in the battleship, I hope you will conduct research for yourself.  
b. If you feel *any* interest in the battleship, I hope you will conduct research for yourself.
- iii) a. When we wake up in the morning, our condition is bad because we have not eaten for about ten hours.  
b. When we wake up in the morning, our body is not ready to do *anything* because we have not eaten for about ten hours.

陳述緩和命題に関して適切に表現できないのは、以下のような例である。

- (23) Please don't hesitate to contact me with any questions *you might have*.  
 (24) We apologize for any inconvenience *this may cause/you may suffer*.

(23) は、既に (18) として挙げた例である。(24) は、例えばある会社に何か問題が生じて、それにより顧客に迷惑がかかる可能性がある場合に、顧客に及ぶ可能性のある不都合を前もって謝罪しておく表現である。これら二つの文における questions および inconvenience は、現実世界で既に生じているのではなく、その生起の可能性を想定した不定の命題となっているため、これらの名詞には any が先行し、かつ名詞を修飾する関係詞節は助動詞 might あるいは may を伴っている。(23)、(24) ともに、いずれも比較的頻繁に使われる表現であるが、日本人学生にとってはなかなか産出が難しいレベルの表現である。any の使用とあわせ、この種の表現をより難しくしているのは、先の (21)、(22) と違って、陳述緩和命題が文の述部ではなく、文の中の要素、ここでは名詞を修飾する部分に表れていることである。事実、この例のように、学生のフリーライティングにおいて、名詞の後の修飾句に陳述緩和命題を用いたケースを目にすることはかなり稀である。

そこで、同様のコンテキストで果たして学生がこのような文を算出できるかどうかを見るため、やはりライティングクラスの学生に、以下のような二つの課題を与えて英文を書かせた。もちろん、学生にはこの課題の意図は伏せておいた。

- (25) ある店舗が、本日午前中に配達予定の品が交通渋滞のために配達が午後になるということを伝えた後で、「このことで顧客に不都合 (inconvenience) が生じる可能性があることをあらかじめ謝罪する」場合、以下の英語に続けて一文で表現しなさい。

We apologize for

- (26) 「今後緊急の事態が生じる可能性があるが、そのような事態が生じたとき、それに備える準備はできていますか」を以下の英語に続けて一文で表現しなさい。

Are you ready to deal with

課題を課したこちらの側としてはそれぞれ以下のような英文を期待していたのであるが、こちらの意図を知らない学生にしてみれば、何を求められているのかわからないことから生じる戸惑いもあったと予測され、案の定、さまざまな回答が出てきた。

(24) We apologize for any inconvenience *this may cause/you may suffer*.

(27) Are you ready to deal with any emergency *which might occur*?

確実に言えるのは、上のような形式の英文を書いた学生は極めて少数であったため、多くの学生はそもそもこの表現自体を知らなかったと推測される。しかし、学生は相応のライティング力をもっていれば、それを応用してこちらが求める形式を用いることも当然期待できる。そこで調査では、まず、該当箇所を“名詞 + 関係詞節”の構造を用いた学生がどのくらいいるのかを調べ、また、そのうちどれほどの学生が助動詞を用いた陳述緩和命題の形式で表現しているかを調べた。その結果、(25)について“名詞 (inconvenience) + 関係詞”の構造で表現していたのは、39名中わずか3名であり、その3名はいずれも関係詞節に助動詞 *may* あるいは *would* を用いていた。<sup>7</sup> 興味深かったのは、該当部分に *inconvenience* を用いたものの、関係詞節は何も添えなかった学生が9名もいたことである。しかも、それらの学生のほとんどは、*inconvenience* の前の限定詞に *your* もしくは *the* を使用しており、あたかも「不都合の生起」が確定しているかのような表現形式をとっていた。

(28) #We apologize for the inconvenience.<sup>8</sup>

一方、(26)について“名詞 (emergency) + 関係詞節”の構造をとっていたのは、39名中14名で、このうち関係詞節の部分に陳述緩和の形式をとっていたのは、13名であった。(25)とは対照的に、(26)については意外にも13名もの学生がこちらが期待する形式を用いた理由は定かで

7 こちらが期待した回答に最も近かった学生の英文を挙げておく。

i) We apologize for inconvenience you may have in advance.

8 文頭の # は、当該の文脈では不適切な文であることを示す。

ないが、このうち3名の学生は、(25)の場合と同様、*emergency*の限定詞に *the* を用い、この限定詞と後置する関係詞節とで「定命題 / 不定命題」に関する衝突が見られた。

- (29) \*Are you ready to deal with *the emergency which may happen in the future*?

また、関係詞節の陳述緩和表現と合わせ、不定命題であることを示唆する *any* の用法を調べたところ、それぞれの名詞の前に *any* を添えていた学生は、(25) については3名、(26) については2名であった。さらに名詞句の前の *any* と、名詞修飾句内の陳述緩和表現を同時に用いていた学生は、双方の例ともに皆無であった。

このような調査結果から判断すると、文の中に埋め込まれた名詞について、それを不定命題として表現することに対する意識が、日本人学生の間では全般的に低いと言わざるをえない。ある語が表す概念の存在が単に推測・想定されたものにすぎない場合には、その存在を確定したものとして表現することはできない。これら二つの概念は話し手の認識の中では別個の表示が与えられ、それは以下のように異なる形式として反映される。

- (24) We apologize for *any inconvenience this may cause/you may suffer*.  
 (30) We apologize for *the trouble caused*.

この「定命題 / 不定命題」の区別は日本語でも然りである。しかし、母国語でない英語を使用する日本人学生は、どうしても命題内容そのものに注意が向くあまり、そこでは定世界の描写が優勢となり、不定世界の描写に対する意識はおろそかになりがちである。そして、これが、述部など文の骨格部分でなく、名詞修飾句など文の中に埋め込まれた要素となるとその傾向がより顕著になると言える。

今回のこの調査は、こちらが望む不定命題のコンテキストを作り出すため、(25)、(26) のように文脈を日本語で明示する形で行ったため、特に (26) に関してそうであったように、学生にとっては、“名詞 + 陳述緩和の関係詞節”の構造を算出しやすい素地があったのかもしれない。

従って、本来は、今回のようにいわば“意図的に設定した”コンテキストではなく、本来の学生の作文能力を見るのに自然な環境で書かせた英文を調査対象とした方が望ましかったであろう。それはつまり、学生にフリーに文章を書かせて、該当する文脈で不定世界の描写が適切に行われているかを見ることである。しかし、ともあれ、少なくともこれまで多くの学生のフリーライティングを見てきた限りにおいて、関連する文脈で、ここに論じた陳述緩和表現を適切に用いたケースは極めて少ないというのが筆者の偽らざる印象である。

### 3.3. 仮想命題－いわゆる仮定法の場合

3節での議論の最後に、日本人学生が英語ライティングにおいて苦手な領域のひとつとして、仮想命題の中でも学校文法でいう「仮定法」の用法があることを見ておこう。仮定法は、以下の例に示すように、典型的には、現在あるいは過去に起こった事実と異なる想定をする表現形式である。

(31) If I were a bird, I would fly to you.

(32) If we had caught the bus, we would be at the destination now.

一般的に、仮定法は日本人学習者が修得すべき英語の文法項目の中でも修得が難しいもののひとつとされるが、しかし、いったん仮定法に関するif節と主節の形式・時制等に関する規則を修得してしまえば、理解は比較的容易なものとなる。しかし、その一方で、日本人学生にとって比較的難しいのが、以下に示すように、明示的なif節が現れない形式である。

(33) When touching someone unintentionally on the street, an American almost always apologizes. A Japanese in this case *would* not say anything and just pass by. (A Passage to English, p.38)

上の第2文が該当する文である。第1文の内容は、「街中で何気なく人にぶつかってしまった場合、アメリカ人はほとんどいつも謝る」である。そして第2文の主語名詞句 A Japanese in this case で意図されているのは、

「この場合日本人であれば」という意味で、形式上 if 節が現れていないにもかかわらずそれが含意されていることを理解する必要がある。そのことを理解するヒントになるのが、文脈であると同時に、通常仮定法の主節に現れるとされる助動詞の *would* である。我々はこれらを手がかりに意図された意味を解釈していく必要がある。このように、if 節を伴わない仮定法の解釈はやや難解で、平成24年度の九州大学個別学力試験前期の英語科目でもその訳出が出題されている。

- (34) In the nineteenth century, letting wage-earners stand around drinking coffee *would* have seemed outrageous. (イタリック筆者)

この英文を含む出題文章全体の主旨は、企業で作業効率を上げるためには、社員に休みを一切与えず、ひたすら仕事に打ち込ませるのではなく、時々彼らに休憩を与えるのがよいという考え方が近代において広まり、20世紀においてこの考え方を具現したのが、coffee break の導入であるというものである。そこで、上の英文は、「19世紀であれば、社員がコーヒーを飲みながらぼんやりと突っ立っていることを許すなどということは途方もないことに思われたであろう」という意味である。この英文でも *would* が用いられていることから、19世紀において社員がコーヒーを飲みながら突っ立っていることを許すことは、現実に存在した事実ではなく、ここでは単に想定された状況にすぎないということに気づくことが必要である。従って、in the nineteenth century の部分に「19世紀であったならば」という意味を、あるいは letting wage-earners stand around drinking coffee の部分に「もし…などということがあったとすれば」という意味を読み取ることが重要であるが、表面上の命題内容のみに目を向け *would* を見落とすと、このような仮定の解釈にまでたどり着きにくい。このように、英語リーディングにおいては、if 節が明示されない場合には、そこに仮定の意味を読み取ることが難しい。であれば、リーディング力より相対的にライティング力の劣るとされる日本人にとって、この種の文脈で適切にそれに応じた形式を書くことは必然的にさらに難しいものとなる。

以下では、英語ライティングにおいて、日本人学生が適切に仮定法の形式を用いることができない例をいくつか挙げてみる。

- (35) a. I would appreciate your help/cooperation.  
b. Your cooperation would be appreciated.

これは、こちらが相手の助けや協力を必要としてそれを相手に依頼する際、相手が助けや協力を提供してくれることを期待して、あらかじめ感謝の気持ちを伝える表現である。この文脈で相手の助けや協力はまだ実現していないため、your help/cooperation は不定命題である。ことばを替えれば、この部分には「助けて / ご協力いただけるのであれば」という if 節に相当する意味合いが隠れている。このため、述部に仮定を表す would が用いられている。この点、既に相手が提供した助けや協力に対して感謝の意を表す以下の表現とは対照的である。

- (36) I appreciate your help/cooperation.

ここでは your help/cooperation は既に存在するものであるため、would は現れない。(36) は学生が頻繁に目にする表現である。しかし、この文を (35)a,b と同時に提示されると、それら二つの用法の区別がどこにあるのかを理解していないようである。この点を確認するため、ライティングクラスの39名の学生に、以下の二つの文を同時に提示し、「こちらが困っている時に助けてくれた相手に対し、感謝の気持ちを述べる場合、どちらの表現を使うか」という設問を提示した。

- (37) I appreciate your help.  
(38) I would appreciate your help.

すると結果は意外で、全39名中、正しく (37) と回答したのはわずか16名で、その割合は41.0%に過ぎなかった。これは筆者の推測にすぎないが、丁寧な依頼表現で時に would が用いられることから、学生はこの種の状況で相手への感謝の意を表わすためになるべく丁寧な表現を用いた方がよいと考えた可能性もある。しかし、(37)、(38) とともにかなり頻繁に使用される表現であり、would の有無の区別は、該当する概念が定か不定かということから生じる、仮定の意味合いの有無を反映したものであるということは、学生が着実に修得しておくべきポ

イントである。これに関連して、学生に自由なテーマで書かせたエッセイライティングにおいて実際に用いられた不適切な表現の例を挙げておく。

- (39) The most effective measures is developed countries' financial support to developing countries. People living in developing countries do not have enough money to get food. This is one of the main reasons for their starvation. ?Therefore, financial support *lowers* the selling price of food.

この学生は、このエッセイで発展途上国における食料不足の問題を論じている。その中で、問題の解決方法として、先進国が発展途上国に食料を手に入れるための資金援助をすることを提案している。上の文章の最後の文が問題の文であるが、主語の financial support は筆者によって提案されたアイデアであり、現実には存在するものではない。従って、ここでは述部に would を用いて financial support *would lower* the selling price of food とした方が望ましい。こうすることによって、「財政支援がなされれば…」というニュアンスが生じ、この文脈に適した表現となる。

さて、次に別の類の仮定法の表現に話を移す。日本人学生は以下のような表現の産出にも苦勞する。

- (40) I was having trouble with my computer. I *could have asked* my friend for help, but I didn't.

意図されている意味は、「コンピュータで問題を抱えていて、友達に助けを求めることもできたが、そうしなかった」というものである。could have asked... の部分では、過去において取りえた行動の一つであるが、結果的には取らなかった行動の選択肢が仮定法（過去完了）を用いて表現されている。この種の仮定法ではそもそも if 節を用いないことが標準と思われ、助動詞のみによって現実には存在しない仮想の世界を描く用法のひとつである。それゆえやはり、日本人学生には修得が難しい類の仮定法の用法である。

最後に、日本人学生のライティングにおいて、仮定法に関して、適切

な文脈で最も適切に使用されていないと感じる類の用法を取り上げる。

- (41) As an architect, I have a dream of living in a house of my own design. I want a living and dining room full of sunshine. Soaked in the blessing of sunlight, I *would* spend my time idling on the sofa, just reading stuff I like or chatting with my children.

この文章は、自分が設計した家に住むことを夢に描いているという文脈で、第2文以降は、実際に自分が望む家とそこで暮らす自分の姿を描写している。もちろん、この家は自分が設計する際、心に思い描く家であって、現実には存在するものではない。従って、その家で暮らす自分の姿も、その家が実際に建てられた場合を想定しての描写となる。このため、将来の自分の家で過ごす様子は *will* ではなく、*would* を用いた仮定世界の描写がより適切である。

この種の表現に関して、学生が実際に書いた不適切な表現の例を挙げておく。

- (42) Second, I propose that the area around the university provide an ideal example of a “town on campus.” In this idea, a town *develops* around the campus as the center of the town.

この学生は、エッセイの中で九州大学の将来像をいくつか展望している。その中のひとつが、大学が核となって、その周辺に街が発展していくという “town on campus” の構想である。第2文の伝える内容は彼が提案するこの構想における描写となっている。そのため、この文の述部は、直接法よりも *would* を用いた仮定法、すなわち a town *would* develop around the campus の方が好ましい。こうした例に見られるように、想定された世界の姿を描写する際でも、実際には *would* を用いない学生がほとんどである。学生の認識の中で、描写する状況の枠組みがそもそも現実世界ではないという意識づけが明確になされていないことによるものと思われる。

以上、日本人学生のライティングにおいて、それにふさわしい文脈で仮定の世界の描写に成功していないケースを三つ取り上げてきたが、学

生がさまざまな世界を描写する際、彼らが現実存在する世界が default となるために、仮定された世界、想定された世界を描写する際も、現実世界と同じ視点で描写する傾向にあるようである。この点については、日本人学生に、ライティングの際、現実世界と異なる仮想世界の存在にも目を向けさせ、二つの世界を描く際に用いられる表現形式が異なることを改めて指導することが必要であろう。

#### 4. 結語

本稿では、日本人学生の英語ライティングにおいて、学生の注意が向けられにくい領域のひとつとして不定世界の描写を取り上げた。現実生じている世界と異なり、確定していない世界を表す命題を疑問命題・否定命題・仮想命題・陳述緩和命題の四つに下位区分し、それぞれの命題について、日本人学生が適切な表現の産出に成功していないケースを見てきた。具体的には、疑問・否定・仮想命題に使用される否定対極表現 any、文中の名詞の修飾句に現れる陳述緩和命題を表す助動詞 might や may など、そして、仮想命題を表す would の使用などである。前回の拙論（2015）で論じた進行相、完了相などのアスペクトと同様、今回挙げたそれぞれの項目自体は、（仮定法の would を除き）英語の学習過程の比較的早い段階で学んでいる項目である。つまり、これらの項目の用法について基本的なことは修得しているにもかかわらず、適切な部分で適切に使いこなす応用力が日本人学生には十分に備わっていないことを意味するものである。

さらに、これらの表現の修得を妨げているもうひとつの大きな要因は、これらが不定世界という特殊な世界を表すということである。我々が現に人間としての生活を営んでいるのは現実世界である。しかし、我々人間には、単に現実に対する認識だけでなく、可能性としてありうること、また、現実と異なり起こり得たことにも思いを巡らす能力が備わっていたために、そこから人間の可能性を探求していき、その結果、学問や科学技術においてこれだけの発展・進化を遂げることができたと考えられる（cf. Clegg (2008)）。従って、人間にとって、仮想世界は現実世界と対等ではないとしても、ある程度重要な位置を占めていることは間違いない。とすれば、現実と異なる世界の描写も相応に重視され、それに用いられる形式が現実を描くそれと異なっているとしても、それは

極めて自然なことである。にもかかわらず、我々が経験する世界は default 的に現実世界がベースにあるため、外国語としての英語を学ぶ学習者は、それとは異なる世界の描写にまではなかなか意識が及びにくい。そして、本稿で詳細に論じてきたように、否定対極表現 *any* に関しては、具象的でなく抽象的概念を修飾する場合、助動詞 *might/may* については、文の骨格をなす述部でなく、名詞を修飾する関係節に現れる場合、仮想命題については、それを明示する *if* 節が現れない場合など、何らかの意味で不定命題であることの認識を妨げる要因が存在すると、さらに適切な表現の産出が困難となるのである。

上に見た不定世界を表す適切な表現の例を再度以下に挙げるが、これらについては、日本人が産出しがちな表現と比較すると、表面上の形式を見る限りでは、単に *any* を用いているか否か、*might/may* を用いた名詞句を添えているか否か、*would* を用いているか否かだけの小さな違いに過ぎない。

- (43) Do you feel *any* better today?
- (44) Please don't hesitate to contact me with *any* questions *you might have*.
- (45) A Japanese in this case *would* not say anything and just pass by.

しかし、これまで日本人に特有の思考パターンで書かれた多くの英語を見てきた筆者にとって、わずかにひとつもしくは複数の語（句）が添えられているかどうかによって、英文から受ける印象が大きく変わってくる。上のように適切な表現を用いている英文からは、少なくとも英語における不定世界の描写をわきまえた“センス”のよさを感じ取るのである。多くの日本人ができないからこそ、このような英文に出会った時の指導者としての喜びは大きい。

おそらく、学生がこの方面の英語を適切に書けないのは、不定世界にあまり目を向けないという日本人学習者に共通に見られる認識の基盤があるのと同時に、そうした領域の表現が書けていないということを彼ら自身が気づいていない側面も大きいと思われる。従って、日本人に少しでも英語的発想に近い英語を書かせるためには、日本人学習者が典型的に書けない領域を彼らに認識させることも重要であると思われる。筆者に言わせれば、日本人の英語ライティングにおいてはそのような領域が

いくつか見られ、その中でも特に際立った領域が、前回指摘したアスペクトであり、そして今回取り上げた不定世界の描写である。<sup>9</sup> これまであまり意識の及ばなかったこうした側面に彼らの意識を向けさせ、それを適切に表現する手段を指導してやることで、彼らの書く英文は“センス”を備えた英語に着実に一歩近づくと信じている。

### 参考文献

- Clegg, Brian (2008) *Upgrade Me : Our Amazing Journey to Human 2.0*, St. Martin's Press.  
江口巧 (2015) 「学生の英語ライティングに見るアスペクト」『英語英文学論叢』第65集, 九州大学英語英文学研究会, pp. 31-46.  
榎田一路, 平本哲嗣, Simon Fraser (2008) *Power-up Practice for the TOEIC Test*, revised edition, 英宝社, 東京.  
徳見道夫, 江口巧, 大津隆広, 志水俊広, 鈴木右文, 田中俊也 (2007) 『*A Passage to English* 第5版—大学生のための基礎的英語学習情報』, 九州大学大学院言語文化研究院英語1 共通教科書編集委員会編, 九州大学出版会, 福岡.

---

9 そのほか、come up / over など、動詞の後に方向など空間的意味を表す不変化詞を添えた句動詞、およびその比喩的用法についても日本人学習者は典型的に弱いと感じる。この方面の議論については、いずれ稿を改めたいと思っている。